

永山良子・三根和浪(2018),「豊かな発想を生み出す題材に関する考察」,
広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育第49集」,39-46.

豊かな発想を生み出す題材に関する考察

永山 良子 ・ 三根 和浪*

I はじめに

美術の「表現」と「鑑賞」の活動に共通して不可欠な資質・能力,それは「発想や構想の能力」である。「表現」においても「鑑賞」においても,その具体的な活動の出発点は「何を表そうか」「どうやって表そうか」「何が表されているのか」「どんなふうに表されているのか」と考え,アイデアを生み出すことである。

平成29年3月に公示された新学習指導要領では,「知識及び技能(何を理解しているか・何ができるか)」「思考力,判断力,表現力等(理解していること・できることをどう使うか)」「学びに向かう力,人間性等(どのように社会・世界と関わり,よりよい人生を送るか)」の3つの資質・能力を育成することが目標として掲げられた。これらは,現代あるいは今後の予測不能な時代に,一人一人が世の中の様々な物事を理解し思考し,よりよい社会や豊かな未来を作りだしていくために必要な資質・能力である。美術科の目標は,これら3つの資質・能力に対応して次のように示されている(表1)。

表1 中学校学習指導要領(平成29年3月) 美術編 目標

知識及び技能	対象や事象を捉える造形的な視点について理解するとともに,表現方法を創意工夫し,創造的に表すことができるようにする。
思考力,判断力,表現力等	造形的なよさや美しさ,表現の意図と工夫,美術の働きなどについて考え,主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり,美術や美術文化に対する見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。
学びに向かう力,人間性等	美術の創造活動の喜びを味わい,美術を愛好する心情を育み,感性を豊かにし,心豊かな生活を創造していく態度を養い,豊かな情操を培う。

美術の活動を通して,これら3つの資質・能力とその中核となる「造形的な見方・考え方(感性や想像力を働かせ,対象や事象を,造形的な視点で捉え,自分としての意味や価値を作り出すこと)」を育むことが求められている。

このように,現行学習指導要領では記されなかった「造形的な見方・考え方」や「主題を生み出すこと」が新学習指導要領では教科の目標として明示され,今後の美術科教育においては「思考力,判断力,表現力等」,すなわち「発想や構想の能力」の育成が今日的課題として一層重視されることがわかる。

確かにここ数年,生徒の発想・構想の能力に課題を感じるが増えてきた。授業で表現活動をする際,生徒から「何を作れば(描けば)いいですか」「何色で塗ればいいですか」という質問を受けることが頻繁にあった。「作品づくりの大枠や条件については確認できているが,何をどう表していいかわからない」というのである。こうした生徒は条件の中で自分が表したいものや表す方法を選ぶことが難しく,具体的な方向性を指導者に求めようとする。「思いつかないから」と参考作品や友達の作品,既製のキャラクター商品の模倣にはしる生徒もよく見られる。また,作品としてある程度形になればそれで満足で,さらに豊かな表現を目指して自ら追求しようとする生徒も少しずつ減っているように思う。こうした生徒実態に向き合う中で,考えること(=発想や構想)に対する姿勢やその能力を育てることの必要性を感じ,本研究に至ることとなった。

* 広島大学大学院教育学研究科

Yoshiko NAGAYAMA, Kazunami MINE

A Study on the Subject Matter to Enrich the Idea in Education of Arts

II 研究の目的・方法

本研究は、生徒の「思考力、判断力、表現力等」の育成を目指し、豊かな発想を生み出す題材開発及び授業デザインのあり方を探るためのものである。

「発想マトリクス(後述)」を活用した題材分析、授業実践の後、授業ワークシートの記述、授業アンケートの回答、授業中の活動の様子等から、手立ての効果について考察する。

III 先行研究より

広島大学附属東雲中学校(以下、本校と略記)美術科は、同東雲小学校図画工作科と共に、平成28年度より「発想や構想の能力」にスポットを当てた授業づくりについて取り組んでおり、「発想や構想の能力」について次のように定義している。

＜発想の能力＞

○心に浮かんだ想いやアイデアをビジュアルイメージ(色、形、構造など具体的なフォルムをもった可視的なイメージ)へと高める力

＜構想の能力＞

○表現のために必要な方法や手順、材料・用具などを自己選択、自己決定する力

また、学部・附属共同研究『図画工作科・美術科における教科固有の能力に関する検討ー発想プロセスの可視化を手がかりに』(天野紳一ほか,2017)には、表現題材の学習過程と発想の生起との関係について次のような知見を得たことが記されている。

- ・中学生では学習過程が進み、題材への理解が深まるに連れて徐々に発想が高まる傾向が見られた。
- ・発達段階に関わらず新たな素材や用具、技法などとの出会いが大きく発想を高める要因となっている。
- ・発想を促す意図で導入時に鑑賞した美術作品の作風や表現手法からの影響は、いくつもの完成作品から窺うことができた。
- ・材料や道具に直接働きかけながら試行錯誤する中で新たな発想が生まれ、そこで生み出されたものがさらに次の発想につながっていく「発想の連鎖」が見られた。
- ・中学校の実践では、制作途中の他者との交流が新たな発想の展開に繋がったことがわかった。個人の制作がある程度進んだ段階で設定された交流であったこと、目的や手順が明確であったこと、つまり参加者にとって必然性のある交流であったために、発想の喚起を促す対話が成立したものである。

これらの先行研究より、豊かな発想を生み出す題材には、「想いやアイデア(主題)をもつ」「ビジュアルイメージに置き換える」「自己選択、自己決定する」ための手立てが必要であり、「新たな材料・技法等との出会いと関わり」「他者との交流」は発想を生み出す手立てとして有効であることが分かる。

IV 題材分析・授業デザイン

1 題材「見える化!私の中の〇〇の世界」について

本題材は、「自分が愛する事物」を主題として設定し、自分らしく表す表現方法等を選択し、造形的に表す活動を行うものである。「私の中の世界」を正しく認識できるのは「私」だけであり、他者がそれを同じように捉え、表すことはできない。表したい作品像の自分なりの正解を求めて、表現を追求することができる題材として設定した。対象生徒は本校第2学年生徒80名である。

作品制作においては、用いる材料・技法、表現スタイル(平面・立体、具象・抽象など)を制限せず、生徒に自己選択させることとした。本題材では、イメージする世界やその表現方法が生徒によって全く異なったものになることが予想される。よって、生徒一人ひとりの多様なイメージに迫る造形活動を支援するためには、様々な材料・技法を扱える状況設定が必要と考えた。そして多様な材料・技法を扱うことによって、それらから誘発されて生徒の発想が連鎖し、イメージがさらに豊かに広がっていくことも期待できた。

また、様々な材料・技法等との出会いがビジュアルイメージの獲得に繋がるよう、本題材の学習に先駆けて、表現技法と抽象画の学習をおこなった。表現技法の学習では、資料集『感じる 表す 美術』に掲載されている多様な表現技法を試技してカタログ(サンプル集)を作り、技法の理解・習得を図った。さらに抽象画の学習では、身の回りの具象物の特徴を抽出して抽象的に描く方法と、感覚や感情など元々形象をもたないものを形や色などを用いて抽象的に描く方法を体験した。これらの学習を経ることで生徒は多様な表現方法についての知識・技能を事前に獲得でき、表したい自分の世界についてより豊かにイメージしながら表現を追求できると考えた。

2 「発想マトリクス」をもとにした題材分析

表2は、本題材の発想マトリクスである。「発想マトリクス」とは、学習過程を横軸に、発想喚起要素を縦軸に取り、学習のどの段階でどのように発想が生み出されてくるかを具体的に把握するための表である。発想マトリクスの作成を通して本題材の全体像を捉えてみると、題材の特性としての「主題設定」と「イメージづくり」の活動に、各学習過程を跨ぐ形での活動の連鎖が見える。すべての発想の起点となる「主題設定」とビジュアルイメージを獲得するための「発想・構想」の活動場面に発想喚起のための手立てを講じることで、生徒は作品の完成に至るまで自分らしい表現を追求し続けることができるのではないかと考えた。したがって本題材では、第1・2次の発想段階と第3次後半・第4次の構想段階での手立てを特に重視し、授業を実践した。

表2 発想マトリクス 『見える化！私の中の〇〇の世界』

発想喚起要素		学習過程(全8時間)						
		1	2	3	4	5・6・7	8	
		発想		鑑賞	構想		制作	鑑賞
		テーマ設定	テーマ深化 ※制作の条件(A3ケントボード・モダンテクニック、抽象表現)	多様な表現方法による作品の鑑賞	構想(モチーフ・形・色・質感など)	・構想(構図・技法・手順) ・試作による構想 ・スケッチ交流	・作品制作 ・試作	・振り返り ・相互鑑賞
題材の特性に関わる要素	主題設定(「〇〇の世界」)	偏愛マップ→心の中の世界を見る化	マインドマップ→「〇〇の世界」の深化(見えるものと見えないもの)		「〇〇の世界」のイメージ(ストーリー)の明確化	「〇〇の世界」のイメージ(ストーリー)の揺らぎと明確化		
	イメージづくり(発想・構想)		見えるもの・見えないものをどのように見える化するか→技法	制作につながる技法	主題を表すためのモチーフ・形・色・質感・構成	アイデアスケッチ→主題を表すための構成・技法・制作手順など	主題のイメージに立ち返るより主題に迫る表現方法	多様な表現の可能性に気づく
	制作(多様な表現方法)					モダンテクニック試作	主題に迫る表現方法を試行錯誤・創意工夫適切な制作手順	
	鑑賞			多様な表現方法を用いた作品との出会い		作例鑑賞 相互鑑賞・批評→多様な表現の可能性を考える	他者の表現に学ぶ	自他の作品の主題と表現の関連を味わう
	価値観・自己理解	好きなものの認識 心の開放	価値意識をもつ				心の世界の認識	より質の高い表現を目指す
技能的要素	材料・技法					モダンテクニック 抽象表現	モダンテクニック 抽象表現 様々な描画材	
	構成				レイアウト 構成要素	レイアウト 構成要素		

(1)「主題設定」のための手立て

①偏愛マップ

第1次の授業では、「偏愛マップ」を作成し、主題を決める活動をした。「偏愛マップ」とは、他者とのコミュニケーションを円滑にするために開発されたツールで、A4用紙に自分の好きなものを書きだしたものである。本題材では「偏愛マップ」にコミュニケーションツールとしての役割はもたせず、自分の好きなものを見つめ、主題となりうる要素を引き出すために活用した(図1)。「好き」という肯定

永山良子・三根和浪(2018),「豊かな発想を生み出す題材に関する考察」,
 広島大学附属東雲中学校研究紀要「中学教育第49集」,39-46.

的価値を感じるものを主題設定の要件にしたのは、「自分にとって追求する価値がある」主題として設定し、よりよい表現を追求し続けることに繋がると考えたからである。数多く書き出された好きなものの中から、アートとして表現したいと思うものを選び、主題として設定させることとした。

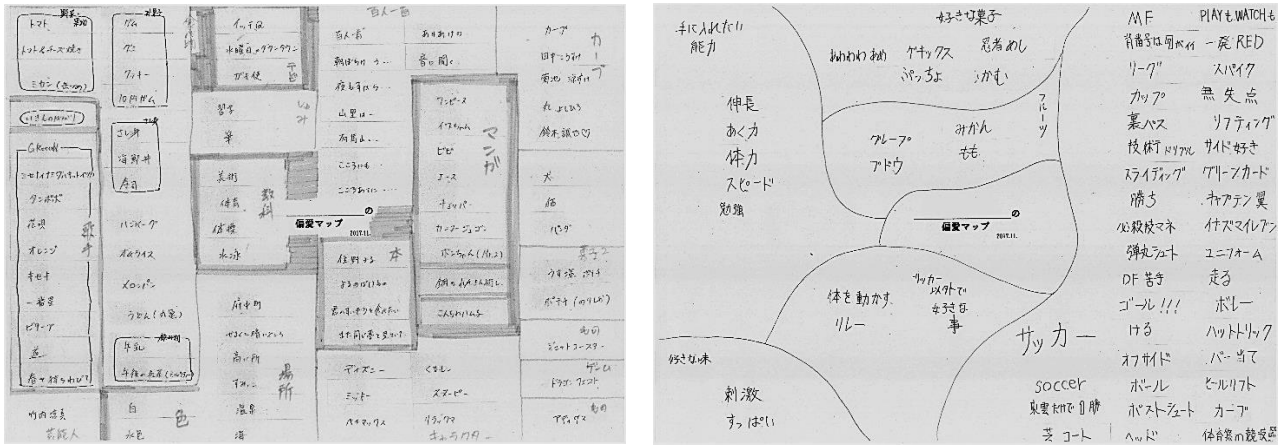


図1 生徒の作成した『偏愛マップ』

②「見えないもの」を考えるマインドマップ

第2次の授業では、「見えるもの」「見えないもの」と領域分けをしたマインドマップを用いて、偏愛マップから生み出した主題を深める活動をした(図2)。「私の中の世界」をより豊かに表すためには、主題として掲げた事物の視覚的な要素を再現的に表現するだけでなく、その事物が包含する視覚以外の要素(「見えないもの」)を視覚に置き換えて表現することが必要である。音やにおい、感情や感覚などの「見えないもの」は、主題を深めて考えなければ発想できない要素であり、そこには主題に対する作者の価値意識が色濃く表れてくる。「見えるもの」の姿かたちの美しさに加え、「見えないもの」も表現することによってこそ、他者とは異なる「私の中の世界」をつくりだすことができ、中学生らしい価値の深まりのある表現が生まれてくると考えた。

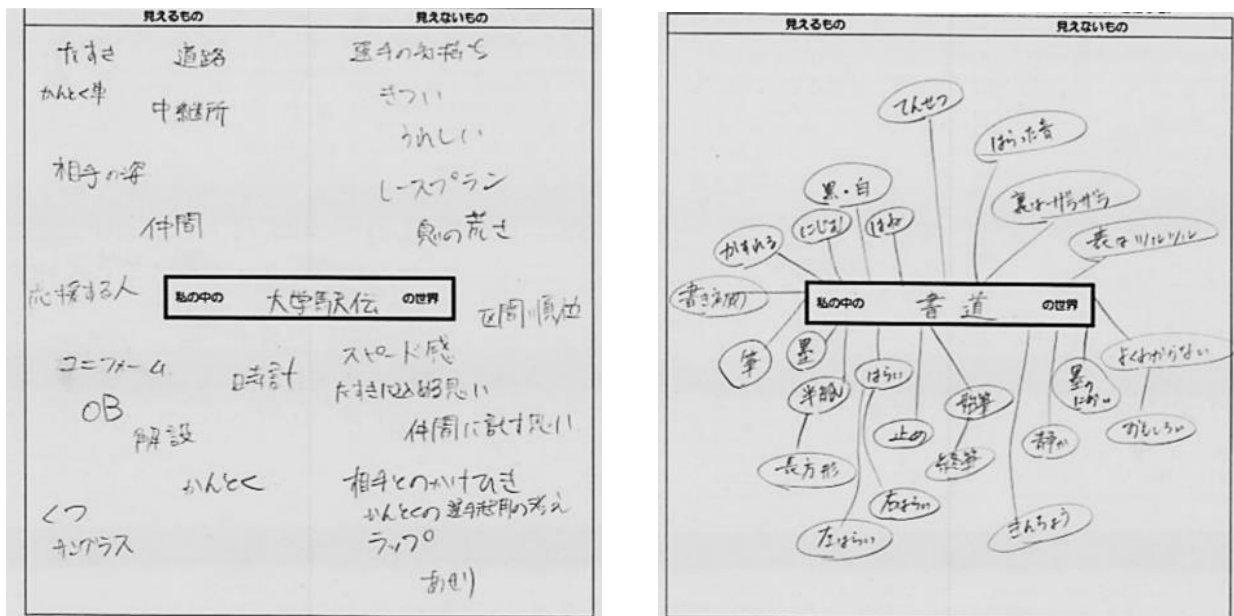


図2 生徒の作成したマインドマップ

(2)「発想・構想」のための手立て

①見える化する方法を考えるワークシート

第3次では、美術作品の鑑賞と、「見えないもの」に見える化するための表現方法についてワークシートを用いて考える活動を行った(図3)。作品鑑賞にあたっては「作者が主題に迫るために表現を工夫していることを理解する」ことを狙いとし、生徒の発想を偏らせないように作品選びに配慮した。またワークシートでは、「見えないもの」(実体のないもの)を「見えるもの」として表すために、どのような形や色に置き換えればよいか、どのような方法でそれを描く(つくる)かを、抽象画や表現技法の授業を振り返りながら考えさせた。

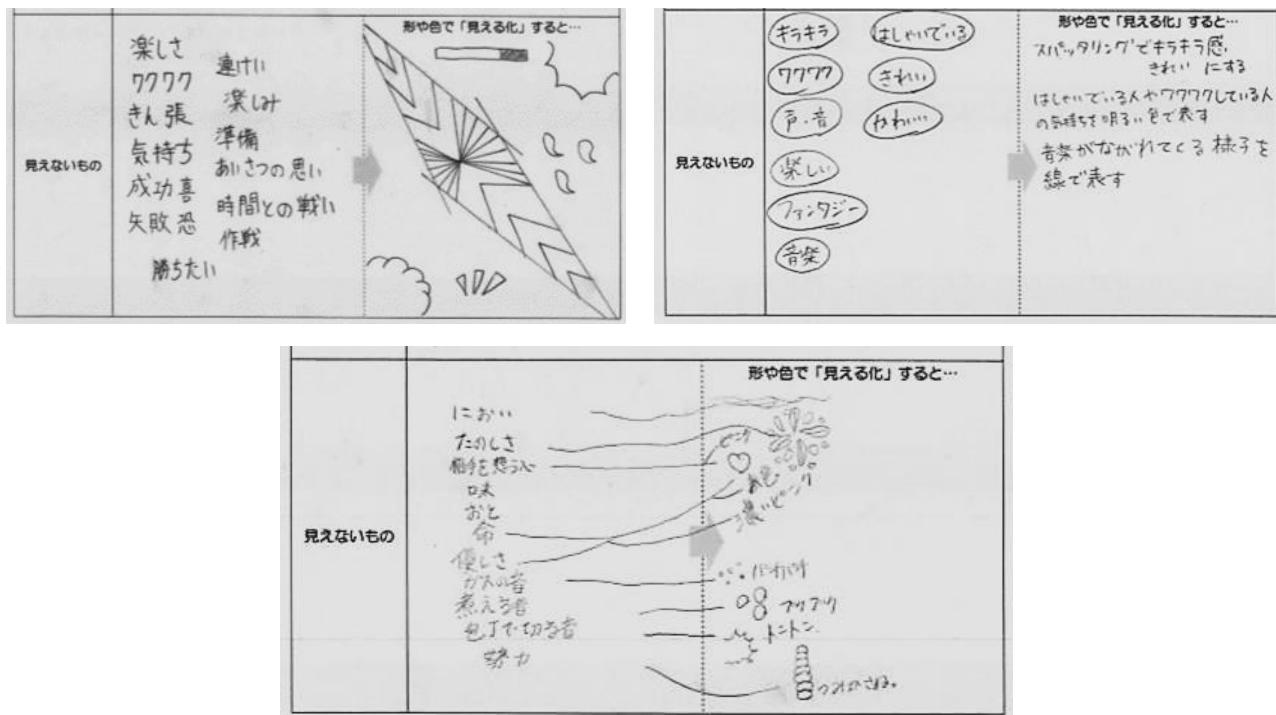


図3 ワークシート(「見えないもの」に見える化する)

②試作・試技

第4次の授業では、本制作のための試作・試技をし、構想を練る活動を行った。作品像をイメージすることとそれを形にして実際に作品化することの間には、時に隔たりがある。それはイメージを実現するだけの技術が身につけていなかったり、形や色などの性質と感情効果を結び付けてイメージすることができていなかったりするからである。作品サイズに近い8つ切画用紙に試作をすることで、イメージする表現に近づくことができるか、その効果等を確認めたり新たな表現方法を発想したりできると考えた。そして、その後の作品制作の段階でも試作を並行して行い、求める表現を追求し続けることができるようにした。

③相互鑑賞

第4次以降の制作過程において適宜作品交流できるようにした。相互に鑑賞することで、友達の意見や作品から新たな発想の手がかりを得たり、自らの表現のあり方を確認めたりすることができる。本題材では、自らの表現活動に没頭しているタイミングで鑑賞活動を無理やり行わせることのないように、制作中の相互鑑賞については特別に時間を設けず各人の必要に応じて適宜行わせた。

V 実践の結果と考察

第5次の授業終了段階で本題材についてのアンケート調査を行った。対象生徒80人中、78人から回答を得られた。アンケートの回答と授業ワークシートの記述、授業中の活動の様子等から、以下、手立ての効果について考察する。

1 「主題設定」について

テーマ(主題)を決定した段階についてアンケートしたところ(表3),『偏愛マップ』をもとに主題を選ぶ段階(第2次前半)を回答した生徒が最も多かった(図4)。また、『偏愛マップ』を作成する段階(第1次)や「見えるもの・見えないもの」を考える段階(第2次後半)回答した生徒も多く、全体の75%の生徒が題材序盤の「発想」過程の中で主題を生み出し、制作の指針としていることがわかる。

表3 アンケート項目2

表現テーマを決定したのはどの段階でしたか。	
1	題材名「見える化!私の中の〇〇の世界」を聞いた (第1次)
2	『偏愛マップ』で自分の中の世界を見つめた(第1次)
3	アートで表現したい「〇〇の世界」を選んだ (第2次前半)
4	「見えるもの・見えないもの」について考えた (第2次後半)
5	表現の工夫が見られる作品鑑賞をした(第3次前半)
6	「見えないもの」を見える化する方法を考えた (第3次後半)
7	試作しながら、イメージを形にする方法を考えた (第4次)
8	表したい世界を制作している (第5次~)

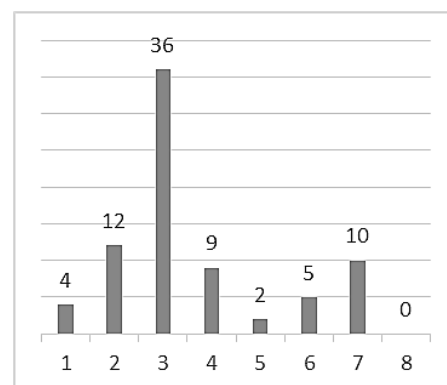


図4 アンケート項目2の結果(人)

偏愛マップの作成では、生徒は24~140個(平均76個)の好きなものを書き出すことができた。授業の振り返りやアンケートの自由記述には、「自分の好きなものを絵に描くのは面白い」、「発想が膨らみやすくて良い」、「この題材は、自分の愛するものについて考える機会を与えてくれるものになった」など、好きなものを主題に取り上げることへの肯定的意見が多く見られ、活動の動機付けにもなっていることが分かる。またマインドマップで「見えないもの」を考え際には、「主題の新たな価値に気付けた」、「見えないものを表すのが楽しみ」など、次の発想に繋がることを予期させる振り返りが見られた。生徒の活動の実態やアンケート項目2の結果から、本題材で活用した2種類のマップは、主題について広く深く発想させる役割を果たし、生徒が自ら主題を生み出す一助となったと考えられる。

一方、いったん決めた主題を途中で変更した生徒も22人いた。彼らが現在の主題を決めた時期は、試作段階(第4次)が8人と最も多く、次いで多いのは偏愛マップをもとに主題を選ぶ段階(第2次前半)で5人であった。変更の理由を問うたところ、主に「主題を表す方法が思いつかない」、「思ったように主題に迫る表現ができない」、「主題を適切に選択できなかった」の3つの理由が挙げられた。

主題を表す方法が思いつかない生徒はビジュアルイメージの獲得に、思ったように主題に迫る表現ができない生徒は技能の習得に、それぞれ課題があったと考えられる。また、主題を適切に選択できなかった生徒は、限られた時間内に選ばなければならないという制約の中で、熟考なく主題を選択せざるを得なかったと推察される。これらの課題に対しては、主題の選択を第2次以降にずらすとか、第3次以降の学習過程にて既習事項の丁寧な振り返りや材料・技法等の試技・試作、参考作品等の鑑賞をするなどの手立てにより、解決の機会があった。しかし、結果的に主題を変更したのは、つまずきを感じたことによって主題の追求に対するモチベーションが下がったためではないかと考えられる。このことから、「自分にとって追求の価値がある主題」を確実に見出させる点では、マップの活用だけでは手立てとして不十分であったといえる。

2 「発想・構想」について

表4 アンケート項目5

	「〇〇の世界」の具体的な作品像をイメージし始めたのはどの段階でしたか。
1	題材名「見える化！私の中の〇〇の世界」を聞いた（第1次）
2	『偏愛マップ』で自分の中の世界を見つめた（第1次）
3	アートで表現したい「〇〇の世界」を選んだ（第2次前半）
4	「見えるもの・見えないもの」について考えた（第2次後半）
5	表現の工夫が見られる作品鑑賞をした（第3次前半）
6	「見えないもの」に見える化する方法を考えた（第3次後半）
7	試作しながら、イメージを形にする方法を考えた（第4次）
8	表したい世界を制作している（第5次～）

具体的な作品像をイメージし始めた段階についてのアンケート（表4）の回答は、試作段階（第4次）が最も多く、次いで「見えないもの」に見える化する方法を考える段階（第3次後半）、「見えるもの・見えないもの」を考える段階（第2次後半）であった（図5）。試作段階に入る前に作品像がイメージできた生徒は全体の5割であった。

やはり、材料等との直接の関わりが生徒の発想をより豊かにするという事は明らかである。第4次の授業において生徒の活動は活発で、積極的に様々な材料に触れ、技法を試し、作品イメージを豊かにする様子が見られた。一方で、考えるだけの段階でも作品像をイメージできているのは、これまでに積み重ねてきた様々な経験を知識として蓄積し、想像力によってそれを引き出すことができているからであろう。特に、試作段階で表現技法を試す生徒が大半であったことから、本題材の前に学習した表現技法は作品イメージを発想する大きな手がかりとなったと言えよう。さらに制作に取りかかるまでの発想・構想の段階に十分な時間を充てたことも、生徒のイメージを支える要件であったと考える。

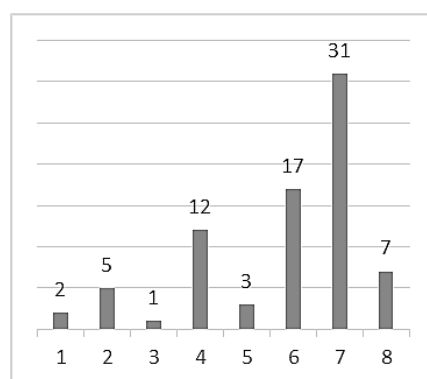


図5 アンケート項目5の結果(人)

表5 アンケート項目6

	「〇〇の世界」像がどのくらい明確にイメージできていますか。
1	表したい形を完全にイメージできている
2	ややあいまいな部分もあるが、だいたいイメージできている
3	はっきりしていない部分のほうが多いが、作り始めるための手がかりとなる大まかなイメージはある
4	ばらばらのイメージは浮かぶが、作品全体としてまとめることができていない
5	ほぼイメージが浮かばず、作りはじめることができない

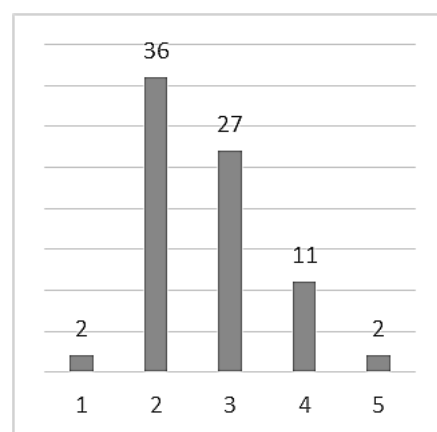


図6 アンケート項目6の結果(人)

作品像のイメージの明確度について（表5）は、完全にイメージできている、あるいはほとんどイメージできていない生徒は2人ずつであった（図6）。9割以上の生徒はイメージをもって制作に取り掛かることができているが、多かれ少なかれ作品像に不明瞭な部分を残しているということである。しかしその不明瞭な「自分の世界」をうやむやに放置するのではなく、イメージや表現方法を追求し、納得できる形で表そうと模索し続けていることが、次のような自由記述から窺える。

生徒の自由記述（一部抜粋）

- ・自分の好きなものを表現するので、とても楽しく活動ができます。どんな表現技法を使うか悩みます。
- ・自分の世界を形や色で表すのはとても面白く、抽象画なのでたくさん考えていこうと思う。
- ・難しいけれど、いろんな人にきいていろいろ思いついたから、いいものを作り上げたいです！
- ・自分の中にあるイメージをしっかりと具現化し、良い作品を作り上げようと思います。
- ・なかなか難しい。けどやりがいがあって楽しいから…。
- ・難しそうだし、失敗するかもしれないけれど頑張りたいと思います。
- ・いろんな表現とかを使ってやっていこうと思うし、そうできたらよい作品になるんじゃないかと思いました。
- ・自分がイメージしたものを描くのはすごく難しいです。でもいろんな技法とかを使って表したいです。
- ・自分の好きなものにこれほど真正面から向き合っただけ具現化したことはないので、作品の出来が楽しみです。

この記述からは、「発想・構想」という難しい活動に継続して取り組めるのは、主題が「自分の（好きな）世界」であるからだということも分かる。発想の連鎖を生み出すためには、自らが追求の価値を感じるだけの「主題」を設定することが必要だと考える。

またアンケートでは、63人の生徒が「友達の活動が自分の発想のヒントになった」とし、それはどの場面での活動であったか尋ねたところ、試作段階を回答した生徒が多数（41人）であった。授業中に特別に相互鑑賞の機会を設けたわけではないが、生徒は自然と仲間の制作の様子やその作品に目を向け、自ら発想のヒントを吸収していることが分かる。また、自分から進んで先生や友達にアドバイスを求めた生徒も54人に上り、アイデアが浮かんでくるのを待つのではなく、自ら引き出そうとしている姿が見えてきた。

Ⅶ おわりに

豊かな発想を生み出す題材のあり方について、授業実践を通して研究を進めた。

発想の原点となる「主題」を生み出させるためには、拡散的な思考を促す工夫と、価値ある主題へと思考を収束させるための適切な手立てを仕組むことが必要である。本研究では、マップの活用によって、拡散的な思考を促すことができた。しかし、数多くの主題となりうる要素の中から「自分にとって価値ある主題」を選び取らせるための手立てについては、改めて考えるべき課題となった。

また、授業実践では、発想を促すために様々な環境（もの・人・場）を与えた結果、材料等との直接の関わりが最も発想の喚起・連想に繋がるということが実証できた。さらに、生徒の中に発想の連鎖が生まれてくるときには、こちらが喚起要素を与えなくとも生徒はそのきっかけを求めて自ら環境と関わり、自らと対話し始めることが分かった。

今後は学習集団全体だけでなく個人の変容にも着目しながら、主体的な発想が生み出されるような題材・授業のデザインとその効果について探っていきたい。

本稿を執筆している今、本題材の授業は完結しておらず、生徒は「自分の中の世界」と向き合い続けている。残りわずかではあるが、生徒が最後まで「自分の世界」を追求し続け、イメージする世界をよりよく表現できるよう支援したい。

【引用・参考文献】

- 文部科学省『中学校学習指導要領解説 美術編』平成20年9月
文部科学省『中学校学習指導要領解説 美術編』平成29年6月
中央教育審議会教育課程部会『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ』2016.8.26
広島大学附属東雲小学校・中学校『平成29年度東雲教育研究会実施要項』2017
天野紳一ほか『図画工作科・美術科における教科固有の能力に関する検討—発想プロセスの可視化を手がかりに』広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要 第45号 2017.3
浜島書店編集部『感じる 表す 美術』2015年3月